

三つの委員会主査

渡 辺 利 夫

拓殖大学総長・学長
【日経調】調査委員・総合委員 稲葉委員会主査
鈴木委員会主査 古賀委員会主査

私の師は原覺天先生と山本登先生の二人である。両先生とも日経調はもとより、いろんな調査研究機関に関係をもっていて、私も二人の先生のカバン持ちとして、大抵は両先生のいずれかが研究主査をしておられる調査研究機関に顔を出させてもらっていた。カバン持ちであるから正式のメンバーではない。オブザーバー—当時そんな名称があったかどうかは思い出せないが—のような存在であった。

そんな私が日経調の委員会に、何といきなり主査として仕事をさせられることになった。しかも委員長は稲葉秀三先生である。その高名はもちろん知っており、著作もいくつか読んでいたのだが、お会いするのは初めてだった。筑波大学の助教授になりたて、まだ嘴の黄色かった当時の私が、この偉大なるエコノミストを仰ぐ委員会の主査となったのである。この原稿を書きながら改めて思い起こしているのだが、大変なことであった。

二年ほど研究会を重ね、昭和59年10月に『アジア産業内分業の進展と日本の課題』という報告書が生まれた。研究主査は、私としては初めてのことだったので幾分かの苦労はなかったはずはないのだが、不思議にそんな感覚は残っていない。おそらくは稲葉先生のあの飄逸なリーダーシップ、いつもの「稲葉節」で会議が和やかに進んだからなのであろう。

非常に強い記憶として残っているのは、昭和電工の名誉会長鈴木治雄さんが委員長を務められ、私が主査を仰せつかったODA（政府開発援助）委員会である。委員会の報告書は『経済協力の理念と方法—効果的实施体制を求めて』と題して昭和62年3月に出版された。当時、ODAについての著作を出版していて、この分野ではいっばしの研究者を気負っていた青臭い私の見解に、鈴木委員長はいちいち同意してくれ、“私も君と大体、同意見だから君の主張にしたがって委員会を導いたらどうか”という。それならと応じ、報告書の骨格となる「基本認識と提言」も私自身の手でまとめた。

もちろん、出版の前には委員会で遣り取りがあったが、記憶に鮮やかなのは宮脇長定さんである。当時、宮脇さんは日経調の専務理事をされており、ODAについては強いご関心をお持ちであった。委員会には毎回のように出席されていた。理想主義の面目躍如の感ありで、人類愛の理念をもって開発途上国支援を展開すべきであり、そのリーダーシップを日本が執るべし、というのが持論であった。時に「絶対的平和主義」への傾きさえ感じることもあった。

それゆえ、「現実主義的」な委員との間には意見の食い違いが時に生まれた。しかし宮脇さんの信念は相当に強く、報告書は宮脇イズムを反映したものとなった。この研究報告書の評価委員の一人であった気賀健三先生から後に、“現実性に欠けるところが目につく”とコメントを頂き、私も返答に窮したことがあった。

私が主査として日経調で最後に仕事をさせてもらったのは、平成14年3月の『21世紀のアジアと日本』である。アジア危機後、各国はそれほどの時間をおかずV字型の回復を果たした。そのアジア経済の強靱性の原因を論じた報告書であった。アジア危機を何かアジアに固有な欠陥の表れであるかのごとく語る当時一般的であった議論を排して、国際金融の粗暴な衝撃からアジアをいかに守るかという点に議論を誘導できたと、今でも多少の自負がある。